# 震災報道と被災者の「日常性」

## —楢葉町・富岡町からの避難者を事例として—

## The News Reports of Tohoku Earthquake and the Ordinariness of Evacuating People

田渕義英
福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科
Yoshihide Tabuchi
Fukushima National College of Technology, Department of Communication Science

（2012年9月28日受理）

While several Japanese media report on Tohoku Earthquake recently, it seems they are focusing on only tragic reality of victims, or heroic stories of recovery. The daily lives of people evacuating from nuclear power plants, however, are neither tragic nor heroic. The realities of their lives are rather ordinary, but they are complicated, plural, and even contradictory. This essay is aiming at directing attention to such complicated and plural "ordinariness" of evacuating people, which are rarely reported by the media.

**Key words:** Tohoku Earthquake, Ordinariness, Nuclear Power Plants, Tsunami, Representation

### 1. はじめに

現在、多くのメディアが東日本大震災の被災者について報道を行っている。そうした報道の多くは、被災地の状況を広く伝え、必要な支援を集めるという意味で重要な役割を果たしてきたし、現在も果たしている。

しかし、報道が被災地や被災者の一面を切り取るものでしかない以上、つねにそこからこぼれる人たち、置き去りにされる人たちがいることも、つとに指摘されてきたことである[1)]。

とりわけ、ニュース性のある情報を放送する必要のある報道機関は、いきおい被災地の惨状や復興の様子ばかりに注目し、被災者の日常から乖離しがちである。阪神・淡路大震災では、被災者から「マスコミが復興・復興と騒いで、被災者にしてみれば復興のニュースばかりで、自分らは見捨てられている」との声も聞かれたという[2)]。

こうした報道は、被災者を悲劇の主人公、あるいは復興の英雄として物語化してしまい、そこからは「普通の被災者」が抜け落ちてしまう。事実、多くの報道は、被災者を「悲しむ主体／怒る主体（＝悲劇のヒロイン）」として、あるいは「立ち上がる主体（＝復興の英雄）」として、ダイコトマスに表象してきた。それはまるで、被災者は、しゃがみこんで下を向いているか、立ち上がって胸を張っているか、そのどちらかしかない、とでも言うようである。

社会学的研究においても、被災者に関する研究は、「心のケア」に関するものと復興に関するものに偏重している。それらはいずれも大切な研究ではあるが、それだけでは被災者の「苦しみ」と「頑張り」が強調され続けるだけであり、そうした「苦しみ」や「頑張り」に対して傍観者であるしかない読者にとって、被災者はますます疎遠なものになっていく。

しかし、被災者にもさまざまな立場の人がおり、みなが一様に心のケアを必要としたり、復興に向けて立ち上がっているわけではない。筆者は足掛け三年にわたって福島県いわき市で仕事をし、ここ半年はいわき市に居を移して、ある意味では被災者のかたわらで生活している。すると、報道されている被災者は、必ずしもすべての被災者を代表しているわけではないということが良く見えてくる。悲嘆にくれているわけではないが立ち直りきれないという人、避難後の環境には恵まれているものの気力を失って立ち止まっている人、被災地を離れて新しい日常を生きている人、そして、意外と避難生活に満足して楽しんでいる人もいる。

こうした人たちもまた被災者であり、そして、そのような人たちは意外と多いのである。しかし、現状では彼らにメディアの光があたることはほとんどない。かわりに、「悲しむ主体／怒る主体（＝悲劇のヒロイン）」と「立ち上がる主体（＝復興の英雄）」としての被災者が、ある種のシンボルとして被災者を代表し、特定の立場の人々の期待を付託されてしまっているように見受けられるのである*。

本研究は、こうした問題意識に基づき、もっと多様な被災者の「生きられた日常」を描写しようとするものである。もとより、被災者個々人の個別的な日常を研究者が再現することは不可能である。それは被災者個々人の一度きりの経験であり、再現可能なものではない。しかし、被災者の言葉に注意深く耳を傾けることで、被災者の多様な日常に向けて我々の「想像力」を開くことは出来ると期待される**。

なお、本研究は原発の擁護をまったく意図していない。本研究の主眼は、原発についての評価は差し当たり保留した上で、原発がアイデンティティの主要な部分を構成するまでに至っている一部の被災者の日常のあり方について理解することにある。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査の目的

被災者はみな、多かれ少なかれ震災によって何らかの喪失を体験し、痛みを抱えている。また、程度の差はあれ、自らの生活を立て直し、復興に向けて努力している。しかし、それが括弧つきの「被災者」として公共の電波にのるときには、その中でも特に極端な例が選択的に抽出され、報道されることになる。

もちろん、政策としてはまずそうした人々のことを考える必要がある。したがって、そのこと自体は即座に批判されるべきものではない。しかしだからといって、そこからこぼれ落ちてしまっている人、ニュースとしてのインパクトはないかも知れないが、それでも被災者として懸命に生きている人々の日常が顧みられなくて良いということにはならないだろう。

本調査は、こうした多様な被災者の日常の生活や、抱えている問題や悩み、普段考えていることなどに広く光をあてることで、現在の紋切り型の被災者像ではなく、被災者の置かれた多様な状況を描写することを目的とする。

### 2.2 調査の対象

本調査は、原発被害（一部津波被害もあり）により全町民が町外避難を余儀なくされている、福島県の富岡町と楢葉町の被災者を対象とする。

調査対象者は、事前に行われた質問紙調査***でインタビュー調査への協力を受諾してくれた人に対して依頼した。

デモグラフィック属性による対象者のスクリーニングは行っていない。また、今回の調査では対

---

* 「特定の立場の人々の期待を付託されてしまっている」とは、たとえば反原発運動に参加する市民が、被災地や被災者の状況にその思いを投影させてしまうことを指している。そこから、「被災者のための反原発」といった、「代弁の構造」（当事者である被災者を、運動に参加している市民が代弁するという構造）が生じるが、それは、実際には、運動している市民が自らの思いを被災者に強制しているに過ぎない。こうした構造の持つ問題性は、ポストコロニアル研究やサバルタン研究などでつとに指摘されてきた。

** 被災者表象の偏重については、ここにきてメディアでも徐々に指摘されようになりつつあるので、改めて研究するまでもないとの批判があるかも知れない。たとえば本論と似た主張を展開している開沼の『「フクシマ」論』[3]なども、「書かれている内容は東北では既知のことばかりだ」といった批判を受けている。しかし、たとえば山下が指摘しているように、それでもテレビのニュースキャスターが「なぜ福島では原発反対運動がないのか」と大真面目に問題提起してしまうような現状が、いまだに存在していることは間違いない[4]。そうした現状に対して、本論が原発避難者の「生の声」を分析しようとすることには、一定の意義があると考えられる。

*** このインタビュー調査は、日本学術振興会科学研究費助成事業である「被災自治体における防災・防犯コミュニティ構築とローカルナレッジ形成に関する研究」（24710176）の一環として行われている。被面接者のスクリーニングは、上記研究で行ったアンケート調査の結果に基づいて行われた。なお、アンケート調査は楢葉町役場と富岡町役場の協力のもとに実施され、いずれも全町調査である。

象者の避難地域はいわき市内に限られる。

### 2.3 調査の方法

上記２．１の目的を達成するために被災者へのインタビュー調査を行った。

震災から一年半が経過し、被災者の生活も以前よりは安定してきたと言えるが、長い避難生活でかえってストレスをためている人や、見知らぬ土地で孤立を深めて、深刻な問題を抱えている人もいるため、インタビューには格別の配慮が必要とされる。とりわけ、いたずらに震災時の記憶を呼び起こしたり、被災者の気持ちを傷つけたりするような問いは避ける必要がある。そこで、質問に対して回答を得るというよりも、対象者に自由にしゃべってもらい、「問わず語りに」必要な情報を聞き出すように努めた。

また、調査は、それ自体が対象者に対するひとつの働きかけである。そのため、まずは対象者の気持ちに「寄り添う」こと、調査者が知りたいことを聞くのではなく、対象者が話したいことに耳を傾けることも、今回特に留意した点である。

なお、本調査はまだ継続中である。対象者のなかには九州など遠く県外に避難している人々も多く、そうした人々への調査は今後の課題となっている。

## 3. 調査の結果と考察

### 3.1 結果の概要

震災と、その後の津波や原発事故は、多くの被災者にとってきわめて厳しい経験である。そのため、インタビューは難航すると思われた。ところが、実際には快くインタビューを引き受けて下さる方々も多く、インタビュー中もほとんどの方が自分から積極的に話をして下さった。インタビュー中に会話が途切れるようなことはなく、ほとんどのインタビューが二時間を超え、なかにはご自宅に４時間近くお邪魔した例もあったほどである。

被面接者の一人であるＴさんは、「今回初めてこうしたインタビューを受けたが，これまで自分たちの声を聞いてくれる場所がなかったので受けた」と言われた。被災者は震災について口が重いと思われがちだが、実際には多くの被災者が様々な思いを抱え、それを吐き出す場所を必要としているように思われた。

フィールド調査とは「自分の思い込みが裏切られていく過程」だと、よく言われる[5]。その意味では、本調査は出だしから筆者の「思い込みが裏切られていく過程」だったということが出来る。

さて、本調査の結果を一言で述べれば、被災者の多くは、震災や原発についてきわめてアンビバレントな思いを抱えているということである。報道では、「被災者」は、同時に「被害者」でもあるかのように描かれる。しかし、実際には、多くの被災者は必ずしも自分たちを一方的な被害者だとは思っていない。とりわけ原発被害を受けて避難している人々には、震災前は自らも原発関係者（東京電力の直接雇用者ばかりでなく、子会社や下請け業者も含め）だった人が多く、そのことにそれなりの自負を抱いている人が多い。そのため彼らは、原発関係の仕事に従事していたことに対する誇りや矜持、あるいは愛着といった肯定的な感情と、原発によって自らの生活が破綻し、日本全国に大きな被害と不安を与えてしまったことに対する否定的な感情との間を揺れ動いている。

インタビューを通して、多くの被災者が、東京電力に対して一定の理解を示そうとした。しかし同時に彼らは、事故を引き起こしたことに対する東電の責任を批判し、事故後のずさんな対応にも憤る。また、東京を中心に全国で広がっている脱原発／反原発の波にも、多くの被災者が違和感を感じていると述べた。しかし同時に彼らは、これ以上原発を運用していくことには躊躇いを感じている。

こうしたアンビバレントな感情は、被災者が自らの意見を「はっきり述べる」ことを難しくしている。前述したように、多くの被災者は「話したがっている」が、自分たち自身でも「何をどのように話せばいいのか」が分からず、迷っているのである。

以下では、今回インタビューに応じてくれた４人の被災者について、インタビューの概要を示し、分析する。

### 3.2 Ｎさん

Ｎさんは楢葉町で生まれ楢葉町で育ち、40 年以

上のキャリアをもつ畳職人である。また、仕事の閑散期には原発職員を運ぶバスの運転手をしており、原発とのかかわりもあった。

Nさんのインタビューで驚いたのは、震災や原発に対する恨み辛みがまったくと言って良いほど出てこないことだった。Nさんの話は、住む場所を確保できたこと、震災後に畳の仕事を再開できたことなどに対する感謝ばかりであり、現状についても「不満を言い出したらきりがない」から、「不満はない」という***。

原発については、「東電が悪い」とは思っておらず、むしろ「地震さえなければ、津波さえなければ」という思いが強い。東電のおかげで実際町には恩恵もあったし、今回ほどの大震災では「想定外も仕方ないのではないか」とNさんは話す。また、東電の社員に対しても同情的で、震災によってリストラされた人たちには「人として同情する」と言われていた。

原発の再稼働については、はっきり反対とは言わず、「考えてしまう」という言葉を使っていた。これは遠回しの反対表明ではあるが、「大飯原発にも働いている人がいることを思うと、一概に再稼働反対とも言えない」ということだった。

### 3.3 Sさん

Sさんは先祖代々富岡町で、Sさん自身も生まれも育ちも富岡町である。震災前は契約社員として東電の寮の仕事をしていた。

Sさんは、避難者という言葉から連想させられる悲惨さや悲壮さをまったく感じさせない人だった。現在でも積極的に富岡町の友人たちと連絡を取り合い、趣味の活動などを継続している。インタビューをしている短いあいだにも、友人が電話をかけてきたり、ご自宅まで野菜を届けに来たりしていた。

しかし、筆者にとって何よりも驚きだったのは、Sさんが既に震災を肯定的にさえ捉えはじめているということだった。Sさんの「震災のおかげで大熊町の友だちの情の深さがわかった」「震災のおかげで夫が自分を育ててくれたことが分かった」「震災を経験した子どもたちに期待する」といった発言は、筆者の被災者イメージを覆すものだった。

原発についても、Sさんは東電が一方的に悪いとは思っていない。「戦後の日本の成長は原発のおかげ」でもあったし、「過疎の村にとって原発は希望」でもあったとSさんは振り返る。こうした事情を考えると、Sさんは「複雑な気持ち」になるという。

また、Sさんは原発で働いている人のことも考えてしまう。Sさん自身は原発には反対だが、そこで働いている人たちのことを考えると声を大にして反対とは言えなくなる。しかし、結局事故が起これば元も子もない。かといって，自分たちは本当に電気のない生活に耐えられるのか、考えは行きつ戻りつするが、「原発はもう懲り懲り」という思いは間違いなくあるという。

Sさんは、堂々巡りする考えを懸命に言葉にしながら、「やっぱり考えがまとまらない」と言って苦笑いした。

### 3.4 Aさん

Aさんは、今回面接した人のなかで唯一の仮設住宅の居住者である。生まれも育ちも楢葉町であり、定年まで会社員をしていた。定年後はバスの運転手をしており、現在は第二原発の作業員の送迎バスを運転している。

Aさんには三人の子どもがいるが、そのうち二人までが原発関係の仕事をしており、ひとりは東電の社員である。Aさん自身も原発関係の仕事をしているので、家族の半分以上が原発に関わっていることになる。そんなAさんは、原発については口が重かった。筆者は、東電の話題になったときの、Aさんの奥さんの不安そうな顔をよく覚えている。

原発についてAさんの最初の言葉は、「肩身が狭い」であった。とうとう最後まではっきりとは口にしなかったが、Aさんは、明らかに個人的には原発支持のようであった。しかし、Aさんの思い

*** 「不満はない」というとき、Nさんはいつも「私ら」という一人称複数で話す。これは、この意見がNさん個人ではなく、少なくともNさんの周辺の被災者に共通した意見であることを想像させる。

は複雑で、ときに矛盾してさえいる。

たとえばAさんは、原発は国の基準に基づいて運転しているのだから、その安全性には科学的な根拠があると考えている。だから、Aさんによれば，いまの状況は「科学的な世の中で感情的な規制がかかっている」状態だという。しかしAさんは、そんな自分の考えに絶対的な自信を持てないでいる。「原発の安全性に本当に自信があったら都内につくるだろう。人口の少ないところにつくったのは、やはり一抹の不安があったからだろう」とAさんはいう。

またAさんは、原発のデメリットばかりが強調される現状にも不満を感じている。Aさんは、原発には多くのメリットもあるのになぜそのことは言われないのか、と批判する。しかしここでも、Aさんの批判は尻すぼみになってしまう。Aさんはすぐに、「でも、これだけの事故を起こしてしまえば、メリットなどと言ってられないのも分かる」と、自分で認めてしまうのである。

「分からない」「決定的なことが何も言えない」という状態が、Aさんの置かれている状況のようだった。

### 3.5 Tさん

Tさんは生まれも育ちも富岡町である。工場に12年勤めたあと、東電向けのサービスを行う企業に移り、そこで原発の仕事に従事するようになった。

Tさんは原発の廃止には反対ではない。しかし、原発の安全性が今後進歩する可能性を考えると、その思いも揺れるようであった。「技術的な進歩を考えれば、原発が将来もっと安全になることだって考えられる」「しかし、これだけの事故を起こしてしまうと、そんなことも言えない気がする」「少なくとも新規に原発を稼働させることはありえないだろう・・・」「やはり原発はゼロに近づけるべきなのだろうか・・・」Tさんは、話しながら何度も行ったり来たりを繰り返した。

また、ほかの被面接者と同じように、Tさんも東電についてそれほど悪い感情を持っていない。Tさんは、「東電、東電というが、東電は国の基準に従って、国の許可のもとで営業していたのだから、国は東電以上に責任がある」という。そして、「国の政策は国民のためなのだから、これから国民が覚悟を持ってエアコンをやめて扇風機にできるか、暖房ではなく薪にできるか、最終的には国民が決めることだ」と述べ、東電よりも国民一人一人の決断を重視している。

東電についての話をうかがっていて印象的だったのは、Tさんが東電を憎むべき対象というよりも、ガス抜きの相手のように捉えていることだった。Tさんは、原発事故の避難者は、津波被害による避難者に比べてずっと恵まれているという。というのも、原発事故に避難者には、東電や国のような不満をぶつけることの出来る相手（Tさんはそれを「あたる相手」と表現する）がいるのに対し、津波の被害者は、自然相手では「あたる」ことも出来ないからだという。このような理解は、筆者にとっても新鮮なものであった。

### 3.6 「揺らぎ」のなかを、前に進む

インタビューから見えてくることは、被災者が震災や原発について、きわめて複雑な心を抱えているということだった。

インタビューに応じてくれた4人の被災者は、いずれも故郷を離れ、借り上げや仮設住宅で暮らしている。震災後は避難場所を転々とし、大きな苦労を経験してきた。しかし彼らは、決して下を向いているだけではない。生活出来ることに感謝し、趣味なども再開している。

しかし、だからといって積極的に地域の復興に取り組んでいるかといえば、必ずしもそうとはいえない。生活に楽しみが戻りつつあるとはいえ、まだ自分たちのことで精一杯であり、地域や自治体にコミットするほどの余裕があるわけではない。

今回のインタビューを通して、悲劇の主人公でもなく復興の英雄でもないが、精一杯生きている、そんな被災者の様子が見えてきたように思う。そしてこれは、多くの被災者の実際の生活ではないだろうか。

原発についても、現在メディアを賑わせているような「反原発／脱原発」は、必ずしも被災者の心情を代表していない。インタビューから見えてきた被災者の原発に対する心情は、もっと複雑で、

ときには矛盾さえしており、原発支持とも原発反対とも言えない、きわめて不安定な状態にあるように思われるのである。

しかし、このような心の迷い、「揺らぎ」は、被災者が震災の絶望を乗り越えて前に進んでいくために、絶対に必要な過程である。似田貝は、阪神・淡路大震災の調査を通して、次のように述べている。

> 被災者が「〈絶望〉から〈希望〉へと転身するという行為は、当該の〈絶望〉の状況を〈希望〉が無くなってしまった通過点として考えるのではなくて、それとは反対に、あらゆる可能性がそこから始まるところの『現実的境界』と考えること」[6]

ここで似田貝は、被災者は、現状を「希望の潰えた地点」ではなく、「希望の出発する地点」として捉える必要があると述べているのである。しかしそのためには、被災者は自らの過去を完全に否定するわけにはいかない。

なんでもかんでも「原発が悪かった」として片づけることは、これまで原発に依存して街づくりをしてきた自分たちの過去を、あるいはまた、日本の電力を担って経済発展に貢献してきたという自負を、すべて否定することに他ならない。

いま、被災者が抱えている迷いや「揺らぎ」は、そうした「自己否定」をせずに未来へ顔を向けるための迷いであり、「揺らぎ」なのである。

## 4. 総括

ここまで見てきたように、被災者は悲劇の主人公でもなく復興の英雄でもない。また、被災者の原発に対する心情は非常にアンビバレントであり、ある意味では決定不能ともいえる状態にある。したがって、現在の報道にみられるような「被災者＝原発の被害者＝反原発」という紋切り型は、被災者の現実を正しく捉えていないと言わざるを得ない。

筆者は、被災者の現実とメディア報道の、このような乖離を、大きな問題だと考える。被災者に寄り添うということは、被災者の気持ちを紋切り型に断定して代弁することではないし、声の大きい反原発の意見だけを被災者の声であるとして、考えがまとまらず声を出せない人たちの迷いを黙殺することでもないはずだ。本当に被災者に寄り添うためには、まず何よりも彼らの迷いとともにあること、その迷いに耳を傾け、共感し、時間をかけてともに迷うことから逃げてはならない。

インタビューをとおして筆者が強く感じたことは、「誰もが話したがっている」ということ、あるいは、もう少し正確に言うならば、「聞かれることを欲している」ということである。いま社会には、「原発反対」や「原発賛成」という、分かりやすくて迷いのない意見はたくさんある。そうした分かりやすい意見については、お互いがお互いの論拠を示して議論する場もある。

しかし、楢葉町や富岡町の人々は、これまでの人生の大半を原発とともに歩みながら、いまは一転して原発によって大きな被害を受けた人々である。彼らは、原発に対する親近感と、原発に対する怒りや不信の狭間を生きているのであって、それは自らの意見や立場の決定不可能性となって現れている。しかし、いまの社会には、そのような迷える主体が「現れる[7]」場所はないのである。

本論の冒頭にも述べたように、被災地の状況を広く伝え、必要な支援を集めるという意味で報道の果たしてきた役割は大きい。しかし、ニュース性を重視する報道の特性ゆえに、その内容は被災者の現実から乖離し、被災者の迷いや「揺らぎ」をかえって抑圧している。いまメディアに求められているのは、こうした構造を少しでも解消し、被災者の迷いや「揺らぎ」に言葉を与えるとともに、その言葉が現れる場所を与えることではないだろうか。

**謝　辞**

本研究の執筆にあたって、福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科の松本行真准教授から多くの示唆を得た。また、同学科５年生の洲崎翔太くんには、面接調査をお手伝いいただいた。ここに明記し、両氏に謝意を表するものである。

また、論文の投稿にあたっては、査読者の方々から大変有意義なコメントを頂戴した。あわせて

感謝申し上げたい。

## 文　献

1) 近藤誠司；被災者に“寄り添った”災害報道に関する一考察 —5.12 中国汶川大地震の事例を通して、自然災害科学、Vol. 28、No. 2 （2009） 137-149 ページ

2) 小城英子；阪神大震災とマスコミ報道の功罪 —記者たちの見た大震災、明石書店（1997）

3) 開沼博，2011，『「フクシマ」論』青土社.

4) 山下祐介，2012，「東京の震災論／東北の震災論——福島第一原発事故をめぐって」『「辺境」からはじまる東京／東北論』明石書店.

5) 門野里栄子；語られない経験の継承 —沖縄・平和活動者のライフヒストリーから、日本オーラル・ヒストリー研究、Vol. 5（2009）63-71 ページ

6) 似田貝香門；再び『共同行為』へ —阪神大震災の調査から、環境社会学研究、Vol. 2（1996） 50-61 ページ

7) ハンナ・アレント；人間の条件、筑摩書房（1994）

補遺

1）インタビュー対象者の属性

| 名前 | 出身 | 年齢 | 原発との関係 |
|---|---|---|---|
| N さん | 楢葉町 | 60 代 | 畳職人、原発のバス運転手 |
| S さん | 富岡町 | 非公開 | 東電の住宅サービス関係 |
| A さん | 楢葉町 | 60 代 | 会社員、原発のバス運転手、三人の子どものうち二人が原発関係に従事しており、１人は東電職員 |
| T さん | 富岡町 | 50 代 | 工場勤務を経て、東電の住宅サービス関係 |

2）インタビュー結果の概要

| 名前 | 原発についての主な発言と解釈 |
|---|---|
| N さん | ・ 原発については、「東電が悪い」とは思っておらず、むしろ「地震さえなければ、津波さえなければ」という思いが強い。東電のおかげで実際町には恩恵もあったし、今回ほどの大震災では「想定外も仕方ないのではないか」<br>・ 東電の社員に対しても同情的で、震災によってリストラされた人たちには「人として同情する」<br>・ 原発の再稼働については、**はっきり反対とは言わず、「考えてしまう」と表現。**これは遠回しの反対表明ではあるが、「大飯原発にも働いている人がいることを思うと、一概に再稼働反対とも言えない」 |
| S さん | ・ 東電が一方的に悪いとは思っていない。「戦後の日本の成長は原発のおかげ」でもあったし、「過疎の村にとって原発は希望」でもあった。こうした事情を考えると、**「複雑な気持ち」になる**<br>・ 原発で働いている人のことも考えてしまう。S さん自身は原発には反対だが、そこで働いている人たちのことを考えると声を大にして反対とは言えなくなる。しかし、結局事故が起こ |

| | |
|---|---|
| | れば元も子もない。かといって，自分たちは本当に電気のない生活に耐えられるのか、**考えは行きつ戻りつする**が、「原発はもう懲り懲り」という思いは間違いなくある<br>・堂々巡りする考えを懸命に言葉にしながら、最後は**「やっぱり考えがまとまらない」と言って苦笑い**した |
| Aさん | ・Aさんは原発についてはロが重かった。原発についてAさんの最初の言葉は、「肩身が狭い」<br>・とうとう最後まではっきりとはロにしなかったが、Aさんは、明らかに個人的には原発支持の様子だが、その発言は常に矛盾する<br>・たとえばAさんは、原発は国の基準に基づいて運転しているのだから、その安全性には科学的な根拠があると考えている。だから、Aさんによれば，いまの状況は「科学的な世の中で感情的な規制がかかっている」状態だという。しかしAさんは、そんな自分の考えに絶対的な自信を持てないでいる。「原発の安全性に本当に自信があったら都内につくるだろう。人口の少ないところにつくったのは、やはり一抹の不安があったからだろう」とAさんはいう<br>・またAさんは、原発のデメリットばかりが強調される現状にも不満を感じている。Aさんは、原発には多くのメリットもあるのになぜそのことは言われないのか、と批判する。しかしここでも、Aさんの批判は尻すぼみになってしまう。Aさんはすぐに、「でも、これだけの事故を起こしてしまえば、メリットなどと言ってられないのも分かる」と、自分で認めてしまう<br>・**「分からない」「決定的なことが何も言えない」という状態**が、Aさんの置かれている状況のようだった |
| Tさん | ・東電についてそれほど悪い感情を持っていない。「東電、東電というが、東電は国の基準に従って、国の許可のもとで営業していたのだから、国は東電以上に責任がある」<br>・Tさんは原発の廃止には反対ではない。しかし、原発の安全性が今後進歩する可能性を考えると、その思いが揺れる<br>・「技術的な進歩を考えれば、原発が将来もっと安全になることだって考えられる」「しかし、これだけの事故を起こしてしまうと、そんなことも言えない気がする」「少なくとも新規に原発を稼働させることはありえないだろう・・・」「やはり原発はゼロに近づけるべきなのだろうか・・・」Tさんは、**話しながら何度も行ったり来たりを繰り返した** |